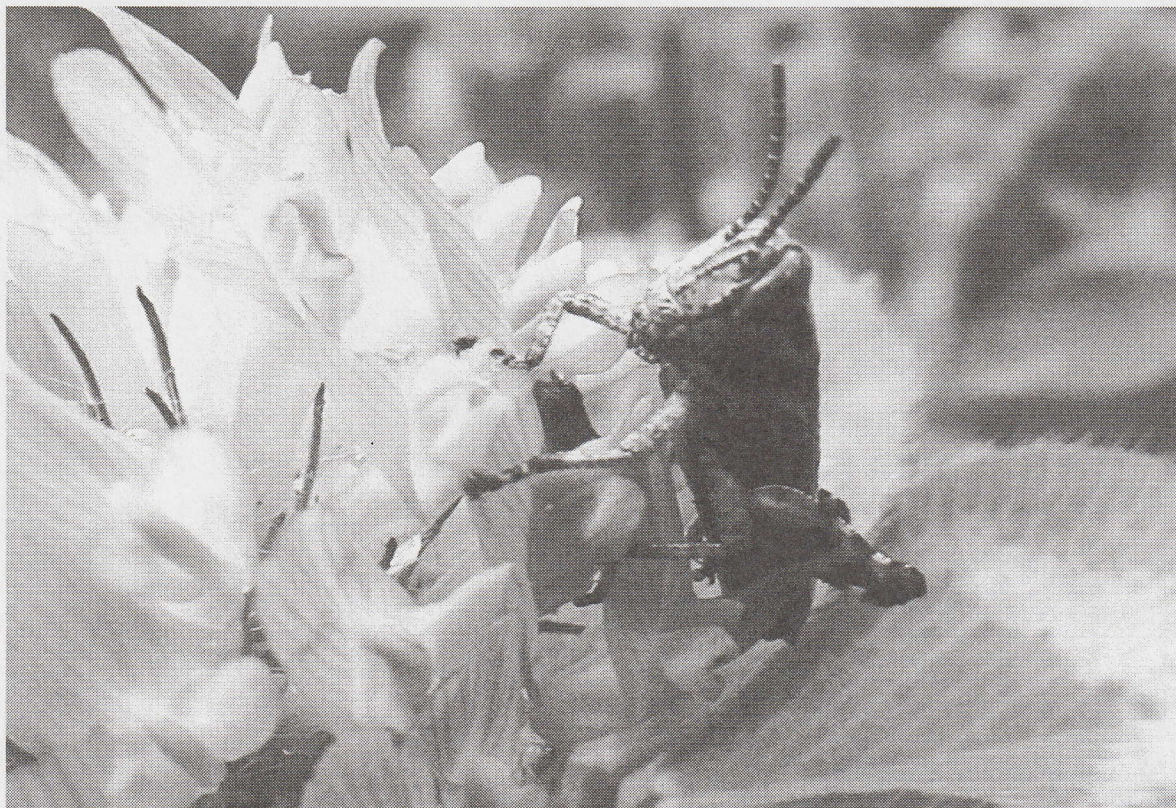


協議会ニュース

No. 172

2021.12



Contents

- | | |
|-------------------------|-------------|
| 1 表紙 | |
| 2 創立 40 周年来賓あいさつ(書面にて) | |
| 3 創立 40 周年記念講演会報告 | 日本自然保護協会事務局 |
| 4 新指導員研修会報告(10/02) | 愛知県自然環境課長 |
| 5 稲武・指導員養成講習会報告(10/10) | 名古屋支部 脇田 剛 |
| 6 あいちの自然観察会報告(10/03) | 名古屋支部 岡島 栄子 |
| 7 愛知県の外来植物 4 | 名古屋支部 安井 弘 |
| 8 小幡緑地・せせらぎ湿地(湿地シリーズ 6) | 東三河支部 星野 芳彦 |
| 9 支部自然自慢 | 東三河支部 瀧崎 吉伸 |
| 10 ご案内/編集後記 | 名古屋支部 平山 希能 |
| | 名古屋支部 滝田 久憲 |
| | 事務局 石原 則義 |

今号の表紙

ツチイナゴの幼虫
お面をかぶっているのかな？

(名古屋支部) 石原 則義(投稿)
生き物のアップの写真大募集中！

創立 40 周年来賓あいさつ 財団法人 日本自然保護協会 事務局長 志村 智子

愛知県環境局環境政策部 自然環境課長 杉本 安信

日本自然保護協会 事務局長 志村 智子

愛知県自然観察指導員連絡協議会の皆様、40 周年おめでとうございます。協議会は、指導員講習会が始まった 1978 年の 3 年後の 1981 年 4 月に設立され、今日まで自然観察指導員の活動を助け、自然保護教育を推進してこられました。『協議会ニュース』は 170 号を越え、毎回充実した内容で作成・配付され、支部を設けて地域ごとの連携を進め、研修会を定期的に行い県内外の指導員に研鑽の場を作ってくれたことは、多くの方の一方ならぬご尽力あってのことと思います。こうした活動を展開してくれた貴会の存在があったからこそ、NACS-J は新指導員の養成をすすめてこられました。心より感謝申し上げます。

この 40 年には色々なことがあったと思います。指導員講習会は、当初は全国的に都道府県との共催でしたが、やがてその形態が変わってきたとき、愛知県では協議会として共催いただけるとおっしゃって頂きとても心強かったことを覚えております。おかげで愛知県では現在も継続して指導員養成ができています。

指導員担当をしていたときに講習会を開催した犬山では、皆さんと木々の梢やつややかなどぐりを観察しました。こうした観察会での自然の見方は変わらないものですが、社会の変化、わたしたちの暮らしの変化によって自然保護の新たな課題は常に生まれてきます。藤前干潟の埋め立て、愛知万博や生物多様性条約 COP10、リニア中央新幹線計画のように愛知県内で日本や世界が注目する多くのできごとがありました。こうした課題に向き合うには、自然保護教育も様々な形や場面で必要になってきます。ぜひこれからも会として活動いただき、県内外指導員の皆さんの活動を支援頂けると幸いです。いつでも・どこでも・だれとでも自然観察会がされ、多様な人が参加で

きる社会の実現に向けて、今後も一緒に歩ませていただくことを願うとともに、貴会の今後のさらなる発展を心より応援しております。

愛知県環境局 自然環境課長 杉本 安信

2010 年、愛知・名古屋で生物多様性条約第 10 回締約国会議が開催され、生物多様性に関する世界目標「愛知目標」が採択されて以降、本県はその達成に貢献するため、「人と自然が共生するあいち」の実現に向けて、大学や NPO、企業、市町村など地域の様々な主体と連携して、生物多様性の保全に向けた取組を推進してまいりました。

現在は、「あいち生物多様性戦略 2030」（2021 年 2 月策定）に基づき、様々な主体が協働して生きものの生息・生育環境をつなぐ「生態系ネットワーク」の形成と、県民や企業等すべての主体が生物多様性に配慮して行動する「生物多様性の主流化」の加速を 2 本柱として各種の取組を進めているところです。

そうした中、実際のフィールドで観察や保全を指導する自然観察指導員の御活躍・御協力は極めて重要です。観察は、人が自然に親しみ、自然を守り、自然と共に生きるための基本となるものからです。

愛知県自然観察指導員連絡協議会が長きにわたり自然観察指導員の育成に取り組まれ、数多くの指導員を輩出してくれたことは、本県の自然環境の保全において大変意義あることと、心から敬意を表します。今後も末永く指導員の育成に取り組まれ、「人と自然が共生するあいち」の実現に貢献していただけることを大いに期待しております。

愛知県自然観察指導員連絡協議会の益々の御発展を心よりお祈り申し上げます。

創立 40 周年記念講演会報告 「日本におけるモグラ類の多様性

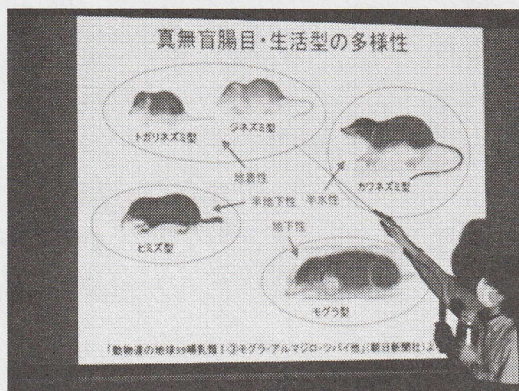
と自然環境」

名古屋支部 脇田 剛

11 月 3 日（祝・水）に、創立 40 周年記念講演会が開催された。講演内容を、以下に記述する。2 時半から質問応答を含めて 2 時間 20 分程、参加者は 38 名。

【研究に至る過程】モグラとの出会いは、進学した信州大学近くの河川敷で見つけたヒミズの死体から始まる。大学農学部のある伊那谷では、低地から 2000m 程までの複雑な自然環境の中で、多様なモグラ類が生息している信州の自然に魅せられて研究を行った。更に、2000 年代「なごや生物性多様センター」に勤務してから見たのは、大都市と接する劣化した環境の中で生きているヒミズであり、名古屋城外堀とその周辺で生き残っているコウベモグラだった。2 種とも絶滅の危機に瀕する中を、たくましく生きている姿が目映った。

「モグラの分布」真無盲腸目のモグラ科に属するものをモグラ類と呼ぶ。名古屋市にはヒミズ、コウベモグラの 2 種、愛知県には更にミズラモグラ、アズマモグラの 2 種が加わり 4 種、そして長野県には更にヒメヒミズを入れた 5 種が生息していることが分かっている。



▲モグラなどの生活型の多様性

【モグラの特徴】長い爪をもち耳介の発達が悪い。尾は短くて前あしが大（シャベル型）で、吻端は可動性、そして地下性（ヒミズは半地下性）である。

モグラの多様性の原因は、大きな山塊が乱立して複雑な地形がつけられていることにある、と考えられる。

【モグラの絶滅危惧種】日本はモグラ大国といわれるが、ミズラモグラ（環境省：準絶滅危惧・愛知県：絶滅危惧ⅠA類）アズマモグラ（愛知県：絶滅危惧Ⅱ類）コウベモグラ（名古屋市：絶滅危惧Ⅱ類）ヒミズ（名古屋市：絶滅危惧ⅠB類）の 4 種が絶滅危惧種である。近年耕作地の減少や都市化による緑地の消失、縮小、分断、乾燥などによって減少の一途をたどっている。

日本の多様な自然を背景に生き残ってきたこれらの奇妙な、そして愛すべき動物が今後も存続できるように、豊かで多様な自然環境を残していきたい。

【愛知県での今後のモグラ類調査・研究トピックス】

- ① 県内におけるモグラ分布図の作成（特にアズマモグラ）
- ② 幻のモグラ・ミズラモグラの探索
- ③ 長野県との県境域に愛知県では未確認のヒメヒミズは生息するのか？
- ④ 愛知県のコウベモグラに大型化する個体群が存在するのはなぜか？

※お詫び

川田伸一郎氏（国立科学博物館動物研究部哺乳類担当）から野呂達哉氏（四日市大学環境情報学部准教授）に講師が変更になりました。

新指導員研修会の報告

名古屋支部 岡島 栄子

内容：バッタの研修会

日時：10月2日(土) 10:00~12:00

場所：守山スポーツセンター (座学)

小幡緑地本園 (野外実習)

公園草地と竜巻池周辺

講師：水野 俊彦氏

(知多支部・名和昆虫博物館研究員)

参加者：10名。そのうち4名が新指導員。

水野先生は県内のいろいろなところで昆虫観察会の講師をされているとのこと。守山にも以前からかかわって来られた。15年ほど前から開発が進んで環境が変わったと残念そうに話された。

今回パワーポイントでの説明予定が機材環境が整わず、口頭とボード板書での説明となった。早口が特徴とご本人は言われたが、その通りだった。聞き漏らした言葉を考えているうちに解説は次々に進んでいった。

1. 座学

ア. 直翅目の分類説明

直翅目は、羽を広げると、筋が真っすぐになっている。バッタ目、ゴキブリ目、カマキリ目、ナナフシ目など。

今日のテーマであるバッタ目は、さらに①バッタ亜目と、コオロギ亜目に分かれる。コオロギ亜目は②コオロギ上科と③キリギリス上科に分かれる。

よく聞く虫の名前の分類だが、ここら辺になると理解が難しくなってくる。

イ. バッタ目全体の特徴は

- ・体が円筒形 ・口の下に顎がある。
- ・後脚の腿が太い・羽を広げて飛ぶ等

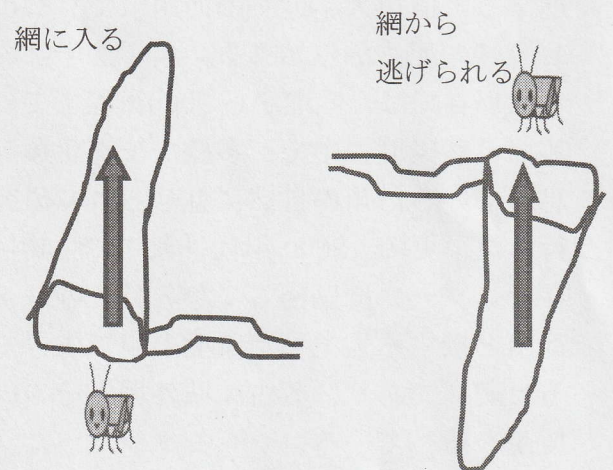
ウ. ①②③の特徴

①バッタ亜目：脚の棘と翅を擦り合わせて鳴く。耳は腹の辺りにある。

②③コウロギ亜科：翅を擦り合わせて鳴く。耳は前足にある。ひげが長い。等々

2. 野外実習

バッタを採集しながら基本的な網の使い方やバッタの持ち方などを教わった。



最後に、捕まえたバッタの名前と特徴を解説して頂いた。ショウリョウバッタ、クビキリギリス、トノサマバッタ、クサキリ、コガネイナゴ等。クルマバッタの翅を広げたら、黒い弧状の模様が美しかった。

3. 振り返って

私は植物観察の機会が多く、昆虫は二の次になることが多い。バッタに特化した研修は有難かった。バッタの分類や特徴などの知識と網の使い方が為になった。

水野先生は、虫を見つけたり捕まえたりするのも巧いが、園内で虫取りをしている子どもにも直ぐに吸い寄せられ、昆虫の話に夢中になる。いつまでも少年の心を持ち続けている先生に出会えたことも楽しい研修の一コマだった。

稲武・指導員養成講習会報告

名古屋支部 安井 弘

昨年はコロナ禍のため中止されたこの会も、今年は10月10日(日)に行うことが出来ました。

豊田市稲武町にある面の木原生林にて、新指導員5名(2019年度生4名・2021年度生1名)を含む13名が参加し、西三河支部の山本博美さんと水谷宗保さんにご案内頂きました。

面の木原生林とは・

豊田市北東部、稲武町の天竜奥三河国定公園内にある自然園地で、標高1,000m～1,200mにあります。単純計算になりますが、名古屋市内の緑地より気温は6～7℃低く、名古屋市が暖温帯に属するのに対し冷温帯に属します。樹林帯の構成樹木種も異なり、ブナやカエデ類を中心とした構成となります。

今年は10月に入っても気温の高い状態が続き、残念ながら紅葉は始まっていませんでしたが、例年の美しいであろう情景が想像できました。

人工林帯から天然林帯へ

歩き始めは人工のスギ林です。この地域は明治の頃から林業が推奨され、スギやヒノキが多く植えられています。「人工林は人が手を入れないといけない」のですが樹冠が閉じてしまっている現在、暗くなってしまった林床は稚樹が育たない。ヤマザクラの200年ものの個体もあるがその跡継ぎがなく、将来的には暗い林内でも耐えられる樹種のみになってしまうかも、との事でした。ところどころに樹種として混じるモミは大気汚染に弱いために、名古屋ではほとんど見ることが出来ません。

「ブナの幹に地衣類がよく生えています。なぜでしょう？」と尋ねられました。

ブナの葉は厚く固く、葉脈も鋸歯の窪んだところに繋がっています。若干上向きに並ぶ葉は雨水を集め、集まった雨水は小枝を通り、大枝に流れ、最後は樹幹流となって根元に届きます。そのため、幹に地衣類が生えやすいのだそうです。水が好きなブナの工夫、落葉も水を保持するのに、役立ち天然の貯水池のいわれを感じました。

普段観られない樹ばかり

名古屋周辺で親しみのあるコナラはありません。コクサギに始まり、フサザクラ、葉だけをみるとカエデ類とは思えない三出葉のメグスリノキ、全く分かれていない葉のチドリノキやサロメチール臭のするミズメ、オオバアサガラ、イヌブナ、北海道にも分布するオヒョウなどなど。樹種ごとに逸話などを解説して頂きました。

これからのブナ林

天然のブナ林が完成するのに600～800年かかるとのこと。近年、林床のスズタケが枯れ、稚樹が育つチャンスなのですが、問題として①温暖化で雪がなく、稚樹を乾燥と寒さから守りにくい②下刈りの際、稚樹も刈られてしまっている(人為的な要素)の二点があるとのこと。

ムササビやモモンガなどの貴重な動物も育っているこの森、春には美しい花が林床に咲くであろうこの森を、次世代に繋げていくことが我々の責務であると考えます。



振り返り

「あいちの自然観察会」実施報告 『萩』三昧で秋を満喫！初立池公園自然観察会

東三河支部 星野 芳彦

当支部主催で、あいち観察会にあたる「初立池(はったちいけ)公園自然観察会」が10月3日(日)に田原市で催されました。今年度もコロナの影響で中止が相次ぎ、やっと開催にこぎつけることが出来ました。

初立池とは、伊良湖岬手前の堀切町にある豊川用水の調整池です。水源から約百キロの旅を終えた水は、中心遮水壁型アースダムによって貯められ、灌漑用水としてこの辺りの農業を支えています。周辺は、緑地公園として整備され、散策や自然観察にもってこいの隠れた絶好のポイントです。さらに、辺りの雑木林はサシバなど渡り鳥の休憩スポットにもなっています。

初立池は、中央構造線 MTL と並行する断層に沿ってできた谷の地形を生かして作られ、岩石の露頭やダムの堰堤からの眺望からその様子が見て取れました。また、風の通り道を生かして風力発電の風車が設置され、正に「風の谷」となっていることも参加者一同納得の内容でした。

万葉集にあるように、山上憶良が秋の七草を詠んだ旋頭歌の冒頭には、まず「萩の花」が登場します。今回の観察会では、瀧崎さんのガイドによる、「ハギの花」探しが圧巻でした。僅か、2時間の散策で、ツクシハギ、マルバハギ、トウクサハギ、マルバツクシハギ、ヤマハギ、ネコハギ、メドハギの何と7種ものハギのなかまを観察しました。まさに「ハギ三昧」！



▲ツクシハギ



▲マルバハギ



▲トウクサハギ



▲ヤマハギ



▲ネコハギ



▲メドハギ

この他には、ゴンズイ、ノブドウ、ハクサンボク、ナツフジ、モチノキ、ハスノハカズラなどの草や木の実も堪能。



▲ゴンズイ

一方、池の裏手には、カワウの繁殖地があるらしく、独特の鳴き声が聞こえました。また、足元には、ホンドキツネの糞やイセノナミマイマイ、ニッポンマイマイ、ヤマタニシの貝殻が、また、見上げれば、枯れ木の幹にコゲラの巣穴を発見です。

渥美半島の自然の多様さと残暑の中にも季節の移ろいを感じられて、あっという間の2時間でした。

「渥美半島は、いいところだぞん！また、おいでんよ。待っとるでのん。」(東三河支部一同)

愛知県の外来植物 4

東三河支部

瀧崎 吉伸（愛知県外来種検討委員）

4. 園芸植物由来の帰化植物

現在帰化植物となって除草に手をこまねいているものの中には、意図的に鑑賞目的や食用目的で持ち込まれたものも少なからず存在します。

近年問題となり、環境省の重点対策外来種に指定されているツルクサ科のノハカタカラクサ *Tradescantia flumiensis* Vell.（愛知県内のもは主にミドリハカタカラクサ。品種名'viridis' 写真下）も、元々は葉に博



多帯のような美しい斑が入り、人気の高い園芸植物でした。先祖返りをして斑がなくなっていますが、緑の葉と白い花のコントラストはそれなりに見応えがあります。明るいところにも生育しますが、暗い林床にも入り込んで一面に繁茂し、在来種はもちろん、他の植物の生育を著しく阻害します。花は普通不稔で種子をつくらず、広がりにくいと思われたようですが、地下茎の先に殖芽ができ、栄養繁殖で猛烈に広がります。除去しようと引き抜くと殖芽が地下に散布され、かえって殖え広がってしまいます。豊川市長沢町には、およそ1kmあまりにわたって、県道沿いにスギ林の林床を覆い尽くしている場所もあります。

ときには、園芸目的でおそらくは非法に持ち込まれたものも見いだされます。渥美半島が国内初の侵入地域と考えられるキク科のポンポンアザミ *Campuloclinium macrocephalum* (Less.) DC.（写真下）は、ど



うやら曰く付きの帰化植物のようです。種名が判明するきっかけとなったのは、岐阜県で行われた園芸植物の展示会です。カオリアザミ *Vernonia glabra* (Steetz) Vatke の名前で出展されたこの植物は、南米原産。カオリアザミは南アフリカスワジランドの稀少種で、薬効も知られ規制を受けた植物です。おそらく、誰かが花の色が同じこの植物（スワジランドで強害雑草になっている）を間違えて盗んできたのでしょう。

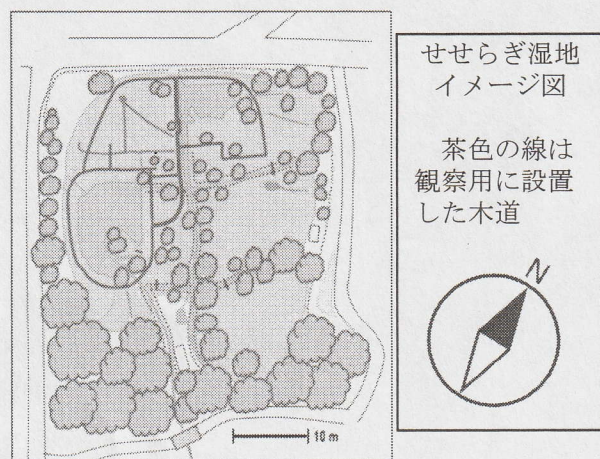
小幡緑地・せせらぎ湿地（湿地シリーズ6）

名古屋支部 平山 希能

1 せせらぎ湿地

「愛知守山自然の会」が自然観察会や保全活動などを行っている名古屋市守山区の小幡緑地（本園）は、粘土質を多く含む猪高部層の上に唐山層が薄く覆っています。そのため、地面を少し掘り返すと水が滲み出してくる場所がいくつかあります。

そんな場所の一つが、せせらぎ広場の北側にある「せせらぎ湿地」です。



ここはかつて一面が湿地でしたが、1960年頃の公園整備で、園路に水が溢れないように水路と土手が設けられました。その後遷移が進んで湿地の植物が減少していましたが、2004年に「愛知守山自然の会」が設立され、湿地の保全活動が始まりました。

2 保全活動

遷移を押さえ日照を確保するための草刈りや周辺の樹木の剪定・伐採作業と、観察用木道の保守点検が主な保全活動です。



初夏には湿地外から侵入する植物を刈り取り、初冬には湿地の富

栄養化を防ぐために枯草を除去します。

観察用の木道は天然木を使用しているために劣化は避けられず、定期的な点検や取り替えが必要となりますが、人手不足もあり、一部を人工木に代えています。



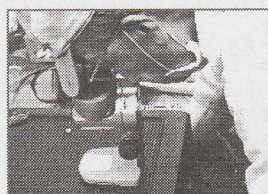
保全作業の一環で耕耘作業を行った後、埋土種子の発芽が増えたので植生調査を行い、湿地性の草本類では約30種類を確認。

3 保全の後のお楽しみ



10月上旬の自然観察会では、せせらぎ湿地のシラタマホシクサとスイランの花を見てもらいました。4月にはハルリンドウ、6月にはトウカイコモウセンゴケ、7月下旬にはサギソウ、9月にはコガマなどの花だけでなく湿地に集まるさまざまな生物たちの営みを観察する楽しさを味わえます。

さて、先日は会で購入した実体顕微鏡で、刈り取ったシラタマホシクサの花を拡大して見ました。これは何でしょうか。またひとつ、自然の不思議を見つけました。



名古屋支部自然自慢

名古屋支部 滝田 久憲

名古屋支部の主な活動範囲は名古屋市内です。愛知県の県庁所在地であり、政令都市ということで、人口も多く、栄を中心にビル街もあり、他支部に比べて、自然が少ないように思われます。事実、緑被率からいって、緑も少ないのですが、都会だからこそ、自然に対するあこがれも強く、交通の便も良いことから、土日などはどこの都市公園も親子連れでいっぱいです。

名古屋市 of 自然の特徴は、東にある猿投山の隆起と西にある養老山地へのもぐりこみという濃尾傾動運動の影響で、名古屋市の東側は東海丘陵要素と呼ばれる粘土層とその上に積もった砂礫層で覆われた東部丘陵が南北に走っています。北は守山区の小幡緑地に始まり、南は緑区の大高緑地までのいくつかの緑地がこの中に含まれます。

こうした緑地の中には、粘土層などの不透水層などにより湧水湿地が形成されているものもあり、そこでは東海地方固有の植物などが見られます。東部丘陵の西には、今から4～5万年前に形成されたと推定される熱田台地があり、安定した地盤の上に、北は名古屋城、南は熱田神宮が建てられ、その周りは緑で覆われています。

さらにその西には熱田台地の傾きの上に積もった新しい時代の沖積平野（濃尾平野の一部）があり、その中を庄内川が流れ、藤前干潟のある名古屋港に注いでいます。藤前干潟やその周辺は渡り鳥の飛来地として、野鳥愛好家にも親しまれています。

こうした変化に富んだ地形（地質）の中で、名古屋支部では東部丘陵にある9箇所の緑地で定例自然観察会を運営しています。これらの自然観察会では、都市公園、湿地やため池などの水辺、雑木林や竹林、田畑

など多種多様な自然環境を利用した観察会を実施しています。

一方西の庄内緑地公園では、交通の便の良さとバリアフリーな自然環境を利用したネイチャ・フィーリングという特色のある自然観察会を運営しています。また名古屋市中心部にある熱田台地では、（当支部が運営する定例自然観察会はありませんが）ふるさと親子自然観察会（あいちの自然観察会）などで名城公園、鶴舞公園、熱田神宮周辺などを訪れています。

自然離れの進みがちな都会の子供たちの自然体験を促すために設立されたなごや自然教室で、西部地域にある庄内川やその上流の岐阜県土岐川、河口の藤前干潟などを訪れました。

ところで、私達が関わっている自然は地球温暖化、外来種の侵入、絶滅危惧種の増加などの生物多様性の持続を危うくするような環境問題にさらされています。そこで、名古屋支部でも、名古屋市環境局の様々な施策に協力して、市内各地で自然観察会や環境学習支援などの活動を行っています。

最後に、こうした都市に残された貴重な自然を将来世代に引き継ぐことも大切です。先の定例自然観察地の多くで、市民による森づくりや湿地の保全活動などが行われており、こうした活動にも当支部の会員が参加し、汗を流しています。



協議会ニュース

No. 172

2021.12



Contents

- | | |
|-------------------------|-------------|
| 1 表紙 | |
| 2 創立 40 周年来賓あいさつ(書面にて) | |
| 3 創立 40 周年記念講演会報告 | 日本自然保護協会事務局 |
| 4 新指導員研修会報告(10/02) | 愛知県自然環境課長 |
| 5 稲武・指導員養成講習会報告(10/10) | 名古屋支部 脇田 剛 |
| 6 あいちの自然観察会報告(10/03) | 名古屋支部 岡島 栄子 |
| 7 愛知県の外来植物 4 | 名古屋支部 安井 弘 |
| 8 小幡緑地・せせらぎ湿地(湿地シリーズ 6) | 東三河支部 星野 芳彦 |
| 9 支部自然自慢 | 東三河支部 瀧崎 吉伸 |
| 10 ご案内/編集後記 | 名古屋支部 平山 希能 |
| | 名古屋支部 滝田 久憲 |
| | 事務局 石原 則義 |

今号の表紙

ツチイナゴの幼虫
お面をかぶっているのかな？

(名古屋支部) 石原 則義(投稿)
生き物のアップの写真大募集中！